



多の菴の表の雨をうらむ 待ひまふ人の垣根よ
けふの草花は花は時をとおねまきかゝる毒と
たづねの月夜にうらむ處にたゞくおれを
とれ哉いづか加ふまゝに古き發句哉引ふ
あゝいづきは客のまゝいづれある事なり何れ
四季にわたりて菴園の松の心月の夜くさる佛如
煤掃の沙走者くさくさく 清くわらわらぬ
此係とせしむるは世の世なり



凡例

は集題の他係と考へ證句は志らんをたれと
古くは句はまたに載す中へは人よ名句の歌へ
あはれも歌のふたへあつたは裁を今のこれ句を
その歌は句の思ふは裁をたれあふ
四季の題は事並にふしは御筆を歌へはる

歌ひはれりやうくちを増出の并新く式古今抄
朽く春拾遺可くかを鞠糸助墨等の題をまたは
考へ題の取捨をたれ

四季の歌は中附句の更へて歌句の歌へはる
多くは是れ歌採去又四方将ふ馬節今の歌
事の人此をうへはるは花燈夕寒食の歌は
吳國の州はまゝ思ふ文書昆州功德經のたふ
起り有るは今をたれり強く歌事考へたへ

その娑情也と云ふ載也

四季の歌に申徳社の神良法寺の法事の歌也
悉く澄句哉奉ふにや多行ありて遠支國の
事外と共名根と志くさしと載きたる系ゆあり
中代ありて祭刀及ひく於菜種御法鞍馬の歌也
等他國より二月迄の仍ハ筑摩祭等の古く
也及ひく於一二名此何哉奉ふ事此金巻
何哉志くし也

四季の歌に申生歌植物の類有り古今に於此
祭句なりと題也と云ふて其句と志くさる
後の人志くさる事と云ふ

四季の歌の題目の中又ハ漢名字義をたき
申く説語のあり用ひ事ハ俗談子語より
教入山吹と云ふれ也云々

四季の歌に申神祇釋教悉く事述懐懐舊
羈旅名所等也其句也其先く羈の部と

卯く附録也

此者の次女茂つゝも其半の句の好悪りて次
其の此者の時代とかく其のよくにあつた事々々
同時此人を混して志願也

春四

類題發句集春部

正月

蝶夢編

元日

元朝や非代の事さ抑もハ歌
草も木も目出度そよくけき成雲
朝夕老人も先つり今朝の春
元日や何よたふん朝物了事
えりかに田この日こそあられ
元日やあつて譲りの太刀帯ん
元日やあつて雀の春物うら祭

伊勢 守武
宗因
忠知
色蕉
公来
嵐聖

のり
 葉采
 標
 かさる繩
 のしり炭
 かさる海老
 着水

松かさ葉採りあふふ入冬後
 ましくせやきとまら山家牛
 しくふあ東雲まぬくそとれが
 由は葉や次青り家の老かさ
 然つけり赤い糸代わかさる繩
 かさる繩や沖代の直れと丸の
 深山木や林表垂るしり炭
 伴勢海老や赤くて先は銀さく
 おう水やまよる川に流る水
 こころあや冬鳥薬子起し介と

其角
 嵐南
 順也
 立圃
 可全
 移伴
 眠魚
 玄梅
 武仙
 野坡

大師
 雜煮
 萬固
 流餅
 屠種

着水や走と高はく筒井つ
 和ら水やまほ折りのと志る物
 大師く冬去冬の書葉の白れ
 雜煮煮や糸代の敷う花山不
 同かよきに娘も養う雜煮は
 ちる免子梅の志うま白ひくれ
 墨かよま枝のなるとは国出た
 走の敷う山ささくれかみ餅
 へすけかや屠種お免和るへ次也
 屠種さして少くは笑ん娘の子

伊勢 乙由
 大和 古山
 尾張 防川
 丹波 出之
 未 自悦
 長法 如行
 加賀 北枝
 尾張 巴雀
 荷号
 立志

春二

大箸 蓬菜 喰積 掛鯛 野志 加栗 串抄 穂俵

大箸我々... 蓬菜... 喰積... 掛鯛... 野志... 加栗... 串抄... 穂俵...

紀前 卯七 加賀 秋之坊 邑蕉 山店 伏水 泥足 和暢 治圃 長英 一思

橙 けり者 敷の子 庭竈 福菜 初曆 高始

けり者... 敷の子... 庭竈... 福菜... 初曆... 高始...

江戸 文徳 出羽 千翎 其角 乙由 宗雨 宗鑑 邑蕉

春七

馬紫始
弓矢矢
松紫始
若衣物
松紫子
楓始

書て先や柄杓の意の十文字
糸初より下年あたる如いの表
袋うらわも目録し馬矢矢
舟中衣小衣より雪の結り花
若衣物志の鼓とも折先花
母衣衣收免つりや若志始
福葉の巻あつり馬衣物始
と交のの波の鼓や松とや
高砂や大おれあつり馬衣物始
とあつり花葉の仕入を楓葉先

江戸 湯門
近江 木守
尾法 留扇
具葉
江戸 玄旨
伊勢 山蜂
末 春波
南 今徳
江戸 暑中
友之

春八

高始
柳正
御初
鹿用
湯麩始
若餅
玉玉

初布や雪伊備早の若葉花
と川市や葉と縁衣とらり何
一と色の公ささ先や柳おし
すれを先や解及氷を引起し
津ちのとれ実八と脱へ葉ひ花
家子花より引出物せん花葉花
月雪衣とあし花人初湯後
初餅下御走のささおさう花
若餅や晴葉のきて梅とあつ
と玉玉柳打る小節の海花

伊勢 嵐南
江戸 温故
伊勢 琴風
末 雲木
立圃
出雲 琴風
尾法 和男
尾法 和水
末 已静
言水

万歳

少く玉の葉もあけのしと秋の里
為軍や海もくくふも欲れ亦
連て東て子は海をり万歳亦

江戸 宗陽

京 柳蓋

尾法 一井

山姥 去来

山姥 飛明

但馬 徳若不知

但馬 柳菟

京 巴静

京 秋月

江戸 狸遊

春近

太鼓

鳥追

春駒

猿引

初葉

継糸

名連や精り初鼓す川
妻あつや村の町を小雲系
猿樂り入るくあま物さる也
山も霞も川系も長来一太鼓者
長生とあへく入る継糸が

ゆり

手鞠

羽子板

やり

破魔弓

竈引

い袖つぎ

ゆりやあまの流乳の枕も
振袖と行ふに奉て手鞠れ
とこ板やた子国生なま替
きり羽子や海もあまぬ妹あり
やりとこ板あこめ子交る多女
とゆきや乳母も手流る二人張
竈引り蛇牛の角張たぐく
室引り夜を床ぬ敷の獲る乳
竈引り力てあまぬ巳との
編つぬやあまの方へ枕をも

京 重雲

但馬 孤舟

江戸 嵐雲

江戸 利牛

伊勢 木導

伊勢 松舎

近江 其角

加賀 李由

伊賀 雨音

伊賀 朝林

御降 年男 水祝 子花白 小松引 若菜

おきくや十日の雨の降る先
松の下歳千代々歌うる響
やう男子秋樂と習ひしり
板の乃に舞ひらまりの水祝
あけと女房扮をん水いしひ
一生のうしろ孫やあ祝い
あうり森と能者うん初子花白
喰へもせぬおとり出さ子の白
己々日無植く旅して小松引
嵐霧よきふ冬賣り若菜が

系 晩山
尾法 重軌
系 舟泉
其角
佳妻 祇川
尾法 松末
也有
白尼
芭蕉

春十

一しとより一夜摘く葎が乳
七色子若菜つと出たき方が
きふ若菜甘く了初お畑う乳
嘗と畑く出あふおの菜が
摘枝を踏付うる親若菜が
芥子かお端をこしと親若菜が
酸く手て若菜つ起へまき若菜が
りるおや鶴付おし足のお
情おしと摘も足へお若菜が
ゆれ椽や蘇古海くく太かうり

尾法 去芳
尾法 楚水
中 浪化
尾法 踏連
加賀 惟鏡
江戸 万子
尾法 秋風
野水
嵐雪

蒜薹

辛くくくと雪付て来と菜葉
ゆらゆらく水より七草より
此のふき高し其那は若かり
名菜つを指の太さとあり男
志め此まで許そ負へ雪のあつ
七種やゆめり舞の杖り
ごころりも顔は白へ分蒜の
鶏よりひのりさきもふ蒜の
今のくも此の蒜薹たよや
七草や留牙ゆくは口の巾

来山 静後
乙由 加賀
其考 尾張
一音 上野
其薹
猿轡 伊賀
我黒 永
北枝

蒜薹

福涌

初富系

本芽淡

春下

笑れく酒をち直るあのか
七くさや次手よたく名は骨
まればよさむし蒜薹も
それとにたけおれの水
水鶏ももひの巻の蒜の
蓋取く那もくあは蒜の
ゆらゆらし蒜の餅の水の
と川魚の沈降てまのれ梅の寺
蓋をひて去多の考もあり本芽淡
花咲て若く尾の春おし

景道 白戸
松隈 吳佐
此薹 静後
其薹 江戸
舟外 吳佐
見示 近江
圓入
貞位 山姥
圓石
其角

具足後用
左義長

綱引

小豆粥

粥はら

粥杖

節振舞

雲の内

嘗て我志地くくれと春あけ
伊勢湯老の鏡ひまわ具足杖
ひのふやたしとまをた義長
た義長や横也あてのふり
綱ひまわや巻よ師公神い

京 風園
許六
李吟
我臨
龜遊

正月後のちうにぬ粥とら
加はええと外ふりてうとわり
於此あた引物後や和田のそ
去取く帯の物日よ集まりり

此 冬粒
系 三敷
近 孟遠
江戸 不角

春十二

廿日正月
御忌

木地の娘

数入

雲かた若と年まり松の内
正月と廿日よりあく新煮り
松崎身ゆきへ一と忌の鏡
ちうたぬ鏡の若や御忌の子
梅咲く木地の娘の白の乳
衣又入わ牛合点して大石返
やかへやちたふと孫けり
数入や炎さへきん親あろ
あふ入の委夜たのく文は
書又入りとのまふして火焼

近 秋石
系 嵐雲
其談
陰 玄音
素心
其角
近 軍庫
冷天
忍尺
連之

福寿草

木の芽

春の八和母へ二日の宮侍の
春又八和如く子以摘取の
福壽草もくに同出交根より
福壽草けき咲物と梅より
能中や一母の足ある木の芽
そやさしく咲ぬ梢も木の芽の
兼虫の息吹て居る木の芽は
春は木の芽かきくも木の芽は
木の芽芽とてさうやると歌
ゆる木の芽はゆらぬ芽と云れ

甲子 我羊
永 素流
近の 吹風
彦根 文素
尾上 露治
永 露川
伊賀 素流
伊賀 北
出 雪芝
春十三

下崩

莖立
若草

下崩や庭あそむ中あはれ
子あやかしめくきとけし
下崩やつた下りもあはれ
莖立や花も咲きておとけ
如か草や松よりけし
こころや花子もあはれ
若草や神あそびかり
若草やまもあそび相
日く料やゆき彩色の川
如く草や安きと来と来

越中 二川
越後 北溟
伊賀 若草
伊賀 松舟
南都 此筋
尾上 鬼市
伊賀 已百
伊賀 風眩
伊賀 杜菱
温故

女系名紫

梅

口口子の入はくを集りりく
敬この歌香の山谷子のあまふ
梅よりりの山と日の雪山流る
山里あふ萬葉連一も光の花
なるり枝投のさけあや梅の系
梅の花光るあふくてもあふひれ
行枝り脈やかよひく妻の花
豎は咲横りつる想や梅の思
愛に口きうさう梅のそれ
愛して吾人さく愛れ皆ひら

梅中 侍翠 芭蕉 其角 来山 支考 尚白 路通 大来

卷十四

月子立ちく心月をや一妻の花
梅の鳥や火持と妻のまきうは
立ちの如木も古ひら梅の系
愛も小首ひ初るも妻の思
妻一つえ一輪侍のあふくさ
む光咲や川の野分れ枝の葉
も如くり咲梅のそと梅の花
枝ありは接射てやむ光咲れ
妻の心この月あつたおとやあ
暮るる人か思ふや光の思

猿雉 深菟 金羅 佩休 嵐雪 地坡 云芳 惟光 桃咲

のみち海とのひて教さけ妻の子
 出来ぬをのし乃備や梅中名もれ
 梅の忌おきよつらぬ糸色分
 起免まやふ今里あらしの角
 枯さし昔あさよ扱整分もれ
 久しうて侍子ゆりう妻方心花
 何名我ま川を横り梅の華
 寒若くてもよひま咲や梅の花
 十八町舞より里何り梅能心
 妻咲や片扱もゆ死も括かう

吳信 前川
信忠 曾良
尾休 裁人
加賀 勺空
成中 後古
交後 挑化
吳信 曾九
江戸 乙由
 柳居

春十又

柳

河之く歌覚懐とありや梅の忌
 妻咲や何う悔ても妻冬春
 梅咲くゆ合ぬ地無からし危
 八九石ぞて雨あ歌柳い
 傘て押分尺きう柳の那
 風やんき懐ふゆ久妻もれ
 志何うぞやぬれ志く柳は
 己六本よりて志と歌柳もれ
 風ありに妻の雨ゆる春乳まら
 意の有山を帯巻尺こし

出羽 嵐七
吳信 千代
吳信 五筑
 芭蕉
 不角
吳信 木因
 春来
 其角
 支考

海より月けりあはれは柳の乳
清くゆく馬の鈴の音に柳
吹度と蝶の居る柳の終
柳の海は揺りて川を弄る乳
引く色も故かひもさあは
人々の中へあはれを形に
海へあはれと日のあはれも柳に
木免の眠りあはれも柳に
侘子こゝ月のあはれも柳に
川とへあはれも柳に

難波 由乎
糸 心す
加賀 一笑
尾法 文亭
浪化 文字
形坡
吟風
此節

風のゆくあはれしるの柳に
あはれのかさめゆく風の柳に
又もゆくあはれも柳に
海は柳の影もあはれも柳に
水は柳の影もあはれも柳に
去直よあはれも柳に
一本あはれも柳に
花さあはれも柳に
柳てあはれも柳に
あはれも柳に

柳水
牧亭
小春
蘆古
三河 山川
糸 柳後
助豊
尾法 乙由
木兒
柳君

嫁ぐま死

春柳や花きく木も刷し死
路も長くまへく遠く春の光
さんゆりと水も流る柳も
何となく二月も来し春の光
青葉やおもひはる春の色
凍解りりほつれ笑や落のま
柳もくもく山の乾きや落の棠
そのつらみ残燭ほてるぬる棠
ふれ中にもれきるれ嫁菜は
二葉もつらみはるやまると死

春十七
一字
すて
楓林
柳坡
米室
秋瓜
乙兒
文豪
風之
希因

落の棠

鴛菜

種子出く小鶴や何れも鴛菜
くくく菜も春の棠のまへ
おのろくとえりる棠の水菜も

尚白
馬六
東流

水入菜

渡菘菜

我事と鏡の面一板芥は
手もろれとせとあしぬ田芥は

大草
春白
十丈

芥はつやむらへは子鶴の如

若菜もあはれと鏡の板芥は

乙語

角くむ芦

川流や淡哉やまむさ芦の角
まこまへ海のやまむさ芦の角

猿籠
三惟

松の毛緑

のひくとゆるほぬ春の心より
踏む道の小春や志より
黒深こま松のそとわおの緑
後をや砂のうら松の心より
くひまもさぬまをへと春の心
夕風や春の花ちる花曇り
あやうん嫁菜よあけ干大根
妹の春は白ひわ海の大根
皺らうるまを春や水の海
海よりあけ後母の形端が

海苔

干大根

春の花

京 滴水

涼茶

去芳

操愛

春元

伊賀 冬李

永 信位

後河 菜豆

北酒

春流

春十八

龍葵

山椒皮

海苔

鶯

春のうき味をさやと老袋
龍葵心へゆき梅のちりごと
山椒のかく皮をくく龍葵が
川水や何よりそゆる海苔の味
春のうき吹なうけや磯のうき
のうきやまきへて波も立ゆり
春のうきや浪のうきまて春の色
くく龍葵や園柄のうき笛のうき
鶯のうきなけそ何なるうき
くく山椒や春のうきうき

永 一途

永 吾菜

磯通

江戸 其角

下総 系丸

春後 免石

永 一軒

持付 貞室

免石

免石

うらみかや領よ養まはる様ゆえ
 黄名や汁が枯紫と踏ぬ
 うらみかや身と近う初まら
 字久勢や葉の木畑まぬ夜
 鳥や約のち啼え那うも
 うらみかやせしきまぬ
 黄名や根もまらぬ中
 黄名や雀さやく聲も
 うらみかやにせしきまぬ
 常やつとま下り木の花

色葉 荷葉 毛角 大草 玄米 冬草 木固 神坡 嵐堂 北枝

春十九

常や雀さやく聲も
 うらみかやにせしきまぬ
 常やつとま下り木の花
 黄名や根もまらぬ中
 黄名や雀さやく聲も
 うらみかやにせしきまぬ
 常やつとま下り木の花
 黄名や根もまらぬ中
 黄名や雀さやく聲も
 うらみかやにせしきまぬ
 常やつとま下り木の花

如行 斜枝 利牛 高川 伊勢 十丈 反朱 浪記 林お

雲和加し出たあはへ越てし
 とくは此のふも替く初き
 美るやあしと夢の古うは
 五千馬部あふ衣日あうは
 川と冬あつ梅を百ちやや梨
 等あはあかからおそ春の定
 唾やさえつるあは水うも
 白魚やあへうあう身と似のあ
 ちう笑の餌り本あしあの他
 白魚やあまきうは消ぬへ

美原 雲字
美原 應字
美原 尚字
美原 其角
美原 文泉
美原 猿鉦
美原 貞隆
美原 担風

白魚あ針さつらあ能う乳
 白魚の志あま白ひや枚の美
 ふあうり價あつるさうそり
 一升あかあはあうり飲ら
 ぬもあまうらあや観ら
 鈴や山へかへはくあの色
 魚あうり破るあの色那
 物あまうらあうりあ田の美
 春風やあの中しああ音

美原 角呂
美原 御所
美原 橋始
美原 白堂
美原 其角
美原 里亮
美原 孤松
美原 跨山
美原 云雀
美原 木導

雪解

春風や三保の松系清見寺
灸の点下ぬるも度は春の風
鏡子の尾ま春風ゆく日影は
さうのせや汐の裾より松の音
唄きぬ旅人あけし春風凡
春かきや布よ水まく小石系
かきくひのそをわあや春の飛
雪杉もあけぬもやけ春の風
春死すつれと栗の枯葉は
雪解や於へ出く下駄の足

免責 許六 尚念 潘川 真太 改白 春満 康工 蝶爰 治徳

春北一

雪汁 雪乃 残雪

雪解や朝の刻木のさし取
かきまわく炭火くま雪解は
雪とけて仲仲川残ひ来れ
雪にぬわるとれおしと数小藤系
雪汁や喰いさめ場中さ
候く下塔の雪乃れ雪うれ
枚起て畑敷又さる雪乃れ
雪の言たも子うへ雪の糸
の雪雪比雪の谷く見り
春の雪のともぬ雪や残る雪

水魚 青雨 曉巻 木心 乙妙 生角 涼老 正金 虚云

春雪

春の雪雨かちよんやうる春の雪
下筋の糸色とけきや春の雪
うんや梅の枝と下筋の糸
羽子板の端とけきや春の雪
淡雪や一つとけきや春の雪
傘も雨く戻りや春の雪
凍るや春の雪と梅の枝
雪よりほろりと梅の氷うれ

凍解

我後 鶯海
文春
一笑
李由
伊賀 春日
系 吾仲
尾法 嵐弾
已静
去芳
小枝

水ぬるむ

凍とけや春の雪のゆく
終子帯てひの入りや水うれ
系とよと氷ゆふと川に那
舟橋やぬるや春の雪の
残雪の小唄も雪や水ぬる
ぬるむとけきや春の雪
及びかくぬるや水ぬるむ
おひらりと雪の枯木も春の雪
春の雪や春の雪も春の雪
春の雪日枝と春の雪

夜

系 一海
仙行
係爰
乙筑
近江 軍殿
丹後 阿流
尾法 文水
救風
芭蕉
言水

澁庭

幸望の麦や菜種や朝のこ
中川明て舟くまひくたかそま
宗舟かた立枝もろや和庭
仲り帆の枝とやしく夕か
おとあふふとあふふ庭くれ
あ波のまかろりてや船長
帆張らる輪轆のさや朝舟
庭くろりの空捲く宵のか
夕暮や雲我を後と清く
我もか名清と持りけり夕

免責 荷台 希因 多醉 又 後川 尺布 伊泉 子風 藤夏

長閑

のささや海か〜い〜海路よ
も深きたれも心ぬ却来り
長閑さやまの娘も三ヶ一
く〜や田の中きろ海り水
〜ら〜やあ如布と物く仲の石
も深き〜さ〜〜あ〜磯乃乃
おれさや定よ〜川も名れお
長閑はや美よ〜あ〜海路
あ〜さ〜あ〜あ〜横の〜あ〜
暖〜〜さ〜〜あ〜あ〜泳〜り〜

木節 杜園 利牛 一有 碩産 菜丸 雨竹 萬國 洲外 秋風

暖

條寒

くさひまの行つりやうきさく
獲るまことおれぬ改申
彼屋あさきさき一夜おこ
ゆはれまひのちあきぬ
候うけも物もぬる解き
背戸中あつたえりり田堀
はえりふれまぬ大津
佐保水やゆり西いりり

支考
仙化
乙由
文意
文意
泥足
嵐降

二月

春九四

二日矣

きさく地や身あぢ子と押笑
執の悪考いぬ二日矣うり
まひ午や建たくるて御戸用
初午や下向と碎く長老教
はつむや志を物と赤の飯
まひ午や初実よ化るるを屋
取せよあまぬく條の使し
釋奠や改むるまことのり
地まひの地まきりぬる形
傍協の顔と背りまきりぬる

辺
伊勢
北坡
吾仲
山只
也育
其角
宗子
治徳
謀爰

初午

釋奠

薪の能

傍協の顔と背りまきりぬる

謀爰

二月老修法

湯城松明

涅槃會

水とらやきりぬ傍の皆方山者
吾汁と若杖の水をためとて
松明や路岳林のりまきり
春のといふに山風の山とく
歎息孔不龍あり神元像
涅槃と云や彼を命とて珠粒の言
孫子ありと云はるまに涅槃
たれんふありと云はる涅槃像
乙入も後教と云はる神元像
木仏も神像と云はる涅槃像

芭蕉
玄梅
方山
神明
季吟
伊賀 菫
孫子
楓女
己百
許山

涅槃と云や片肌龍漢力外
神元像よりある親如の立佛
有とて候りて涅槃像
涅槃と云やそれとて和文日の光
大佛も横巻と云はる南入城
志保り死きと云はる神元像
手枕の樂と云はる和涅槃像
至愛と云はる和文二月神元像
神元と云はる和文神元像
涅槃と云はる和文神元像

若杖 樹松
左次
寸き
言水
出石 不玉
乙由
木兒
伊賀 至川
入登
神元 止弦

小辨菴種御法
貝寄風
彼岸

念佛證
治聲偈
掩月

妙く川のほとり
貝ももやちち
櫻さくあさひ
何れ元く彼岸の
乞食の法辨し
うさうさ花鳥
うわいし念佛
治聲偈の中
海に水鏡の
浣衣のうら

秋鳥
車馬
支考
免黄
吾仲
季友
嵐雪
友松
赤水
古根

廿六

梅の恋や玉時
夕風より何
梅さくあさひ
水鏡のうら
秋鳥のうら
車馬のうら
支考のうら
免黄のうら
吾仲のうら
季友のうら
嵐雪のうら
友松のうら
赤水のうら
古根のうら

芭蕉
水枝
言水
支考
赤水
古根

路も衣帯も志まはれ櫛も
櫛も夜や埃の標木の名は書
何れへり水もさきに櫛月
公の素衣は櫛も若くは
物の名もさきに櫛も月
登見ると花は代若や櫛も
志まはれ櫛も志まはれ櫛も
帆柱のほろひも若や櫛も
六条より汐も焼く櫛も月
ちり花の言はれも若や櫛も

春因
范宇
春波
梅路
唐元
可風
政白
秋瓜

春九七

出代

夕も水も櫛も水も櫛も月
登りれは若くは若くは月
出から若くは若くは若くは
残月も出らる櫛も若くは
おらるの若くは若くは若くは
出若くは若くは若くは若くは
おらるに圖司も若くは若くは
出代りか若くは若くは若くは
おらる若くは若くは若くは若くは
出か若くは若くは若くは若くは

以茶
采林
嵐雪
午那
李由
南山
木導
許六
朱松

陽炎

出かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を

永友元
白鳥
伊勢
若本
乙虫
か賀
一木
伊勢
二曲
芭蕉

かけろが我肩より川紙衣
陽炎やほろく 露ら露の砂
うけはるが被風の瓦れ如意宝珠
かろうやわの借屋よから借を
陽炎やわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を
かろうやわの借屋よから借を

六言
許六
、
秋風
乙物
天無
立志
乱糸
傘下

かげろふわ川の海と蛇蛇うく
 可多ろや去の白ひや車道
 陽妻や横し海しう酒の桶
 加希海ふわ下物ほく所所才
 鷹化して世の代あり蛇の巻
 朝鷹や出るも戻も小くり
 ともあまの尾はけけう白尾
 月けへく星と枝折や仰り枝
 折ろふ山如く目きえつ仰り山
 音消く大声あく歌小く乳

描 范等
系 普山
雨防 啞瓜
か賀 枝系
 其友
白 貞位
江戸 飛水
先か 鶏口
 龍
 松儀

春廿九

鳥交
 鳥の巢
 旋子

晴りやすく鳥あふ不遠きと
 つりたふ鳥や鷹たも年の計
 巣とさふ鳥や在る一造化
 春風りまをまぬをむ花う乳
 糸柳巣りりりるす光る
 鳥の巢や鳥群の工か人分屑
 蛇くふと蛇も恐るく旋子の巻
 何事のおたたりさそ旋子の巻
 折ひ子とつらくも蛇の声

鳥 蕉堂
山 思房
鳥 為有
下 可吟
江戸 春雨
 芋月
 芭蕉
 涼菟
 千那

遠きもひけと鏡子の海より
ふりて北歌や鏡子の海より
春の陣を何はうとたかしの家
多し物や素ふ鏡子の聲より
静かな鳴りぬたしの調子より
山の幅啼ひかけり鏡子の如
若角よりひあうとまきしの是
春の世とたこのやあひる声
何れかやあひるの紐や夜の鏡子
負しんうと短業くおのの急

玄来
其角
入山
那坡
荻人
那明
岩虎
巴静

春三十

燕

秋をくは燕くかへく鏡子の色
かまきと支事とつれと鏡子の
板立と衣くま外とつれと
啼泣の那と静さきと鏡子の聲
那と山より外より春の聲
春の事とた一あうりたもさ
何れか鏡く四つ世とつれと
燕より流かあへそ村も光
あう風と流とやれ燕より
松ふと川とあへつれとあう那

淇園
千代
周外
初丸
園更
桐雨
涼菖
芭蕉
老丸
玄来

燕や一子成り小舟の待はば
乙名物田と成り久しきもの
お女中化粧の中や亀つと先
燕や成り来りて長き目も
山の畑につと先と成り入る
榮花中や名成りて親つと
炎出りたぐ成り成り乙名
乙名物集の中や成り私結
乙名物何れ成り成り成り

山姥 金蛇
神寺
木澤
洞林
左角
峯嵐
氣彈
乙名
小春
乙名

春北一

白鳥
箱島
松野
帰雁

在の中は横もち成り成り成り
お女物のより成り成り成り
市羽多表りて成り成り成り
唾や成り成り成り成り成り
果成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り
子成り成り成り成り成り成り
麦成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り

乙名
和中
可枝
曾衣
怪能
雨路
野水
成老
文章

かゝるておのまゝとてはのまゝ
帰る馬米つまむとておのまゝ
夜通しに何れ油丁のまゝ
立さく今や紀の馬伊勢の丁
たゝまゝのまゝのまゝ
何事とて田舎のまゝ
吹礼とておのまゝ
まゝとておのまゝ
友喊とておのまゝ
仲とておのまゝ

公来
之角
浪化
伊勢
津雄
荊口
子英
嵐雲
朱松
恩棠
岩中
岩中
春世二

雲雀

まゝとておのまゝ
京中やおのまゝ
長とておのまゝ
啼とておのまゝ
夕とておのまゝ
風とておのまゝ
東雲とておのまゝ
まゝとておのまゝ
三日月とておのまゝ
秋の木とておのまゝ

諸九
芭蕉
孤登
之石
憶登
如泉
三子風
冰花

響

子やまゝんあまのさむけのさる
春風了り力くくふ雲雀うれ
思ふ物いふのさるのさる
日中のさるに長けらひりり
作向り度くえそ那のひりり
夕むもて翌の日のみそを
作向も下りりりりりりりり
氣をへりりりりりりりりり
中川つ夜よふりりりりりり
花のさるさる響のさるさる

山只 千代 紀六 杜条 乙南 除風 謙山 李中 地水 秋風

春世三

駒

花の子

蝶

駒を此花あつひりりりりり
春をいさむんや駒のさる
花子とあまかちりりりりり
人の秋のさるさる花の子
ま、花子や姉りりりりりり
蝶煙くはるさる物りりりり
起るく我友よせんぬら蝶
春をいさむく蝶るこてりり
酒くさ人よけりりりりりり
ぬまかくふ蝶さるの胡蝶が

乙羽 為雷 嵐茶 芭蕉 湖春 槐市 免黄 芭蕉 沙為 乙の

くらがへり麦の取やふ胡蝶が
 やまらてき胡蝶うつくた蝶くれ
 ら川うらと手切く花れぬた蝶
 楊の子れえんつほくまのこころれ
 蝶くや花のあく日のたやま
 思ひも昔まふまぬた蝶が
 風吹り舞のたまふてくさ
 物いこく花し中らた胡蝶が
 道まより落て冬つよく風のてく
 蝶くや花を人ぞけくし

曾良
 柳青 仁賢
 瓶聲
 左角
 成道
 木周 出指
 空行
 柳居
 蓮之 江戸
 丁橋 江戸

春世四

何の草をきんく蝶のう海が
 蝶くや花のあく日のたやま
 てくくや花のあく日のたやま
 蝶くや女子の道衣たやま
 蝶くや花のあく日のたやま
 先へてて傘の上をふ胡蝶が
 山吹の河成いららく蝶のあ
 蝶の葉や一らくくり見也
 蝶の葉や留まをふ蝶が
 蛇の目の何々怪うく子合也

己筑
 秋凡 江戸
 鳥明
 子代 未女
 琴之 廣
 巨石
 魚日
 葉二 未
 杜洲 廣
 友考

蜂 乾

蛙

伴向うとあきてりくくや蛙の足
航のあはれ子の破きとあつた
お針ぬかしくうふかたの
格うしろへ入り静る蛙の那
西の蛙あまなりあまも哀く
菜の花はあまのあまの蛙
あかしく蛙たうにうまの教
啼立ちく入相あぬかたの
飛入るくあまのあまの蛙うれ
きろく蛙我類とあまの蛙の那

春井五
嵐象
落格
李由
系也
涼菴
文章
鳥強
公方

和歌の蛙鳴あまの蛙うれ
夕々蛙名角戸はあまの蛙う
蓮花のあまの蛙うれ
田残あまの蛙うれ
いまあまの蛙うれ
朝つく日宵中の蛙うれ
蛙梅れ日残あまの蛙うれ
川あまの蛙うれ
傘強あまの蛙うれ
あまの蛙うれ

山味 此也
西吟
言永
北枝
太来
乙初
乙由
芦本
負佐
麻文

蛙子
地虫出
田螺

猿夜の水さけうらた蛙う乳
 青園や夏秋踏乳とちう蛙
 一思素野木て鳥あま蛙の那
 立すれ水よ集るらから山が
 加う子にうま乳こつてさ
 出川やましくま蛙の子
 蛙子や何あま蛙水の子
 おれらにけけけわん蛙うら
 あうま穴あまてや蛇の雨
 つらくと泡ゆく吹の田あま

秋瓜
 風待
 鶴山
 菜里
 外亭
 砂粒
 蝶麦
 未山
 未陌
 四睡
 春世六

種
初樹
肥
飯銷

仍舟の子踏あまらる田あま
 京政う行目哉捨小田螺う乳
 めり立の踏をゆりあ田螺那
 あまくと空乳と蛙田あま
 滝あへけと蛙あたまうら
 ゆりと蛙あまらる田螺が
 却て冬黒木とやんる刀一肥
 又川樹表独活よか蛙う乳
 美能の中に肥とふりうらう乳
 飯銷ののちやあまらる果るを那

猿維
 七角
 十丈
 如作
 心弦
 牛丈
 曹北
 三思堂
 春寄
 末山

猫の迹

飯草魚や八道の魚の立ぬら
猫の素寢の崩もさう通ひら
味切り事てあゝらや猫の虫
猫のこゑ飽の貝やかおひ
補このひおひう啼て表
由方り舞、有、猫中名ひ
ふれあうたてや猫の望ひ
ふは、好くまう、猫のほら
二三日内、あ、は、補、こ、表、虫
日南ふも、尾のす、ら、猫、虫、虫

^{尾張} 惟烈
芭蕉
本来
^{江戸} 秀和
神坡
末山
支考
尚公
舎死
免黄

卷七

とや色、ま、出、ら、猫、虫、あ、か、ら
猫のひ、嵐、も、あ、ら、は、あ、ら、は、
虫、あ、ら、猫、の、公、名、お、ま、や
う、や、海、か、ひ、ち、ら、耐、猫、の、ひ
か、ろ、く、素、ま、あ、ら、猫、虫、あ
猫の迹、位、く、飯、を、喰、ま、ら
歌、ま、さ、あ、ら、あ、ら、種、の、虫
朝、の、素、あ、ら、猫、の、こ、ら、は、
床、あ、ら、の、あ、ら、あ、ら、猫、の、虫
猫、の、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら

楓林
^{江戸} 秋色
裁人
車番
反朱
林和
免士
嵐七
^末 丈石

麻の角

何れ日の死より後こそ麻の角
やまうれをよきまや麻の角
恋我せし角を悔してや麻の角
角落く三日をしのぶ男麻の角
付の麻くやまきも又あつ小麻の角
麻は平置きしりら麻の角
角落くまのけいし鹿鹿角
非吃や一むつやのさえり
雷もまの物まよりほとま
かまはしめて物を取麻の角

初雷

猿鏝
雲江
白帯
朱控
蕉笠
魯九
蝶爰
去来
凍菘
秋坊

春冊八

紅梅

あつてもれ物まより輪光り
紅梅の日はあして法の赤きり
紅梅やほくまのねと咲きま
紅梅やふんは起さぬ教仕梅
紅梅や雪もまのたきの
くまのや白あまのまのまの
紅梅やりくまのまのまの
黄梅やまのまのまのまの
まの梅八まのまのまの
咲くまの梅のまのまの

黄梅
初梅

ち足
如行
梅仙
赤子
以茶
布舟
冬相
芦水
和及
芭蕉

さし木

接木

苗代

夏の海小橋を道よりけり
一軒下ろちるや日うらの赤橋
今あるともしも蓋方なつて
はつこく水穴のぬき及出木
さし木も直形も折し
乃とふも花を多し接木
梅の葉れとやあり接木
苗代を元とある森の馬乳
名馳く親のあまし苗代田
苗代やうれ歌もあく嘘

利牛
公来
巨海
舟象
一笑
凡雪
芦丸
文考
許六

春四十

晴窓

水口祭

種下

苗代や東寺の塔砂水うま
かきしるや仁王のやれ足の内
苗代より地を水のまこと
苗代の毛接まかた青と乳
苗代や旅うに及る世の親
晴窓や義ゆりまき川
晴窓や架の湖の水引とまけ
小魚まき水の水にあり
種下し俵よりとく小橋

近江 朱迪
舟坡
子英
幽泉
教石
子羽
土佐
荊口
佐渡
文竿
武蔵
柳儿
牛角

種うし

種蒔

種芋

畑打

種蒔く備はれぬ種山
種加や太神宮へ一はらこ
麻蒔や道は二癖の針ぬき
種まねや磨の外より雨まに
たき芋や花のさくら枝葉わら
種芋や植ぬ先うき芽うき
鞠くもくえく畑川男うれ
ゆりと秋湫の光りや雲の種
畑もくもつんかの帯や川白
こも打や打し小志願の如人

京 辨石

上野 左角

伊勢 曉雨

民古

武蔵 芭蕉

吟風

太未

秋風

秋之坊

乃露

春四十一

焼野

すくろ為

山焼

のひ家

胡葱

葱の室

青打のけり先や小田の荒とに
山名や小松の子系焼種は
名はひ焼種を恨や風の来
とやしくはきく吹出た焼種が
雨よりや去年のまくらの子をら
山焼くや野子雲みく雲より
山焼や路り入日の焼種り
猪丸を義城うへ屯のひ家
あま川を冬打あめしら白く乳
鱧の身と一夜寐より葱の室

江戸 煮程

伊勢 在木

其後 猿雄

筑前 呼丁

水札

其後 魚目

其後 異花

伊勢 那明

伊勢 汀芦

伊勢 本残

独活 烏芋 大莖 菘加

香気揚る地をこぼるる莖は
尋とも古来下の独活のえ
佳子の佳くは乃々高くは地
土極如横まこへもはくし
育の雨あつたや土の長し
はくし瓜のあふ穉うれ
等立く何くはあつし
道くもたを子くもち菘加
地のあまここのあしのかか
加し菜やあまこちの菘加

未山 独活 猿椎 圃指 塩車 支考 千代 治位 馬瓢 我黒

春四十三

防風 蓮柱 山葵 菜花 子かた 蕨

今に尺を鼻をちるも入るは
唐の根りあつたや防風
はくしやは廣の候とさし
極あれ指あやまこち指所
は極の候とちりへこりさし
と雲下追あつた馬のあつた
そては流る松や草のくつ菜
芳しれあや花あ好みし
はくしと候地よこや蕨うれ
教るあち極るよと出るは

佳木 素竹 於山 支考 之角 紀東 圃指 之冲 由之 大芳

狗脊の茎より毛の如く鹿の乳
 仙人の墓に指さして鹿の
 子鹿や蓋とら山鹿抱り
 とつて其家の梅より花を
 凡そや日越も其神は
 たんぼや多と下子に
 敵子や録も一きり
 せんほや志おし
 菜の花や院も切つて
 かおむや一本咲く松の下

史邦
 長鉦
 嵐書
 越菜
 柳居
 以之
 淡々
 玄武
 蝶菱
 乃毫

菜の花
 菜の花や小をむら
 菜の花や牧菜の
 菜の花や戸口
 菜の花やあま
 かおむや赫
 たんぼや小
 菜の花や
 かのつるや
 菜の花や
 踏たつた

史邦
 長鉦
 嵐書
 越菜
 柳居
 以之
 淡々
 玄武
 蝶菱
 乃毫

菊

海雲

首

采葛

あつちのし大根の花のさくら色
 菜のふり引のさくら色大根
 いたる系咲きふれと免れきと
 葉も刺も公おら似及淡う那
 常中名おりたれひく海雲が
 塩毒多海の家らや海雲汁
 たおし先やをきき首の二葉つ
 いらの雨のあふりあうれ
 夕暮れおろたきや風中
 いきれ白根、嶽をひきき

曾北
 山姥
 荒雀
 文考
 范字
 巴静
 草吹
 三ノ
 丸丸
 松奴

春四十四

風巾ひらくさくら色小川うれ
 几中引きおろしや軍の教
 くらぬ多細工さくら風巾
 夕暮れおろたきや風中
 常中名おりたれひく海雲が
 塩毒多海の家らや海雲汁
 たおし先やをきき首の二葉つ
 いらの雨のあふりあうれ
 夕暮れおろたきや風中
 いきれ白根、嶽をひきき

舎敷
 風園
 三ノ
 松先
 秋之坊
 東吾
 尾法
 理花
 嵐枝
 子代
 尾法
 阿當
 京
 用舟

三月

上巳の節

照火柳ゆきハ春の香白が

方山

一日鳥挑あまはまきく都くれ

寧陀

曲水

曲水や筆の流る御溝水

角上

川下てまきと盃あき先きり

兼笠

曲水や岩よ三ノ川廻りく

希岡

曲水より桂流るく山路くれ

大光

雛

雛とくそ神ひまきりく雛の歌

金角

雛の振宮獲くはしりく

春四五

春風より二かたが雛の駕張元

萩子

元の子は餅とまあるも雛の歌

如行

姉妹肩並みぬく雛の駕

斜嶺

春梅りのまき雛の屏風が

風國

振舞や下座にあきる去りの雛

太来

雛の口短つ小針くはまきり

天和

雛立ちく局まかるや娘の子

了ん

氣取り入る一候きり雛まつり

荒洞

おつて及中よりく雛の歌

許血

おつて男せうく女や雛ひ那

乙兒

草の條

常分衣きてはあらん草の條
摘てはふ許をわたりて道解
原氏陰の暮の形や草のり
草解や草のりをたてて地の白
草のりや草のりをたてて地の白
形より草のりをたてて地の白
又まゝの草のりをたてて地の白
形より草のりをたてて地の白
形より草のりをたてて地の白
形より草のりをたてて地の白

柳太刀
鶯谷

嵐雪
乙由
近
理然
馬六
七
一桂
之角
春四十一

汐干

傍あもいふに昔く起やう合
衣くは汐干恨さう鶯谷
春のりや又位のとさう鶯谷
春のりの汐干さうさう汐干
さう帆の汐干さうさう汐干
駕籠のりや汐干のりさう汐干
海風も松も汐干さうさう汐干
三日月や汐干さうさう汐干
さうさうさうの汐干や田植
帯海も川のさうさう汐干

峯白
婆公
君里
芭蕉
素来
如象
楓林
木因
似我
沾穂

去後湯獲取
壬生念佛
御笈杖

きんうき土地く見てあるゆきか
彩田よりく中くきほひれ
みくちよ松系志きれひ千り
入き物のかくくきゆりか
ふ浪のくり追新志ほひり
きくくとるあきへくゆき
魂とく法もきれり去後の湯
雲波のりりあきくも壬生念佛
ちれ志の面うもあきく壬生念佛
梅檀の香らきくもあきく

此木
乃露
卷士
杏雨
仙李
梅川
大祇
菊二
白扇
春四七

峯入

永交日

峯入き言もき鞋の旅ゆり
峰入や款七先けり鏢か衣に
永交日や子よにあいて夕馬
あきれ目や仲志き木のよりのき
撒法か衣れきくも日のかき
永交日や清くゆきき
永交日や縁とつれりか田の楮
あきれ目や抄外きりて縁の皮
あきれ目やなうり次身のかき
あきれ目やなうり次身のかき

宗周
大芳
道春
朧水
許六
上枝
朱迪
素丸
文素
阿龍

春の日

永交日や夕影の芳影も雲の裏
春の白雲を佛ゆり花影も
とるれや葉の末留よ小法師
春の日はあけぬてり替は
ゆけり風を吹くくと春の雨
春雨や花の葉つゝふ花根の偏
物とよま子の花とよ春の雨
春雨やとよまを這ふ石灯籠
とる雨やぬきぬは夜の夜
春の雨や火燧を外へ足を出し

下野 松路
尚六
正秀
加賀 見風
玄肯
芭蕉
荊口
秋風
文章
末山

春四六

春雨

月夜の目眩やま光とや春の雨
はるあおとくかんだ日次りれ
花とくは海空へり春のあ光
とる雨や春の公花がくれは
あつとく増おれ喜や春の雨
傘とけりけりけりや春の雨
横りゆかぬ直るやとるの春
葉と近交を織り春の雨
春雨や葉も枯れぬ春の雨
春の雨や古きあつとく春の雨

与考
壬角
一笑
友元
木道
向空
林政
乙由
相之
季布

別業

春雨や四葉己桑のやり木履
用帳の渋よむ日くた敷のあめ
鈴子とらぬぬあふ春の雨
去るや笑し物物とらぬ
夕飯多食て志まひり春の雨
春るや出いへ来てとほとほ
一日冬内は飛くとや去る
去るや眠さそらや春空雨
去るや寝さそら火焼と寒さ
去るや病よりあまのふり

北溟 加賀
素面
杜菱
千代 紀伊
抱花 陸奥
文芸
出母 蝶友
惟中
調素
子那

春四九

田鼠鳴成

郭公の栗

老女栗

鳥啼

雲分

麦熟

呼子為

唄よりほと毛の尻中らうら
川表哉栗う歌くわわおん
老女栗と志風梢子栗の如
去るや去るや去るや去るや
鳥雲り餌さ一人の川流
そに鳥何式見針く這入るや
秋の麦又くや啼おの麦うら
即啼わす種出ぬ麦熟
深山路何と啼へて呼子為

入楚
茂秋
北枝
木良 紀伊
苔峨
そ角
朱拙
万子
巴辭 磐波
万流

雲の霞何やうものか子も
 毛々之節たつとくはしをそ
 彼の志ちうそや磯のさう貝
 ちうころやゆ石の網のむさう
 櫻網笑りく事くよくしん重
 一羽り櫻うく力と嘆せりり
 雲の水は秋の木は葉と柳籠
 ぬまきとも春ま春の葉重う乳
 おくれあつ急の競ひわらう梁
 雨英くたよちうはく小館らぬ

三子風
西鶴
休夜
素世
琴風
廉吹
嵐雪
翠樹
青寄
圃水

春五十一

館の子れんすはま〜は雀の喜
 有館者館の一は爾りたうぬく
 滝壺り令おむ小館う乳
 ちぬ念やもに汲るく小あや
 く〜館や枚りひく〜入日教
 有亭立もに老り〜はの名跡
 伊塞の穴乃き〜たや青々
 娘成あきくゆおゆへてや梅の壺
 伊塞や冬の下老節子也
 螢古歌入冬古代のま〜〜

去芳
老磨
為有
東伴
馬心
楓林
万子
圓入
一意程
曾良

菓子

伊塞

汲館

桑摘

汝女やら中上政と方蚕糸乳
麻て起き喰てこそまぬ菓子
下筋の造りこく琴の那
青くきく蚕飼の家結多海くら
三月や冬の糸巻の桑一本
桑はもや畑の川まきもあきら
桑つや枝り夕日のあきら
糸和布儀文法名妙まてと
乙作のえく和布成百あひら
一浦冬和布より西巻日如う乳

若菜 味雨 青雨 露也 文子 子川 蝶麦 翠巻 涼菘 一帯

春生

若和布

桃 浮世初

うねまやあきとまきふせ所
起しくと白くを界一樹の忌
餅喰み旅人あがもくは花
念極や帯と扇巻水巻と
麻の種毎年ゆまる樹の忌
淋さけくつりよ出さや桃の花
大巻纏てあま入外 桃あま
日守路と思ふてあまや樹の忌
垣杭りいさ志樹の咲り危
枕さくや畑の乳乃挽り先

少波 木周 文考 柳磯 利牛 涼菘 荒弾 飛坡 苦本 乙中

花

かし家や松の権りつゝまは、
鶴の居たり数りう桃のふ
大令の上まき赤し梅乃花
常世の常世ゆかりのむ
花をけくう花の林う那
一僕とほくしありく花んが
花ちりくう花をよ花んが
心あ祭て大のそくう花んが
花山やゆりてかや花出所
笑うに見たりかすま心の数うに

香北
春使
十磨
文意
信徳
季吟
常軌
常矩
我黒
免焚

二百五十一

花のそ待多と花を待多
多待多花んの花多七多待
花んの花んの花んの花ん
うう追く心のりわきく入
花古やふふ既哉付き合を
立枯の張り多きやふの中
竹鹿多岩よかけら花野引
啄木多花枯木法んやむ
花笑も花川うけあむ木
峯のそがくふ多も文多

芭蕉
那坡
凍菘
太来
丈草
木意
野水

花に死かろふ来てあけ酒の泡
我々のもくもあつたはさ
羽風をよよふまは村うら
花の香やあつたはひらひら
春の風の揺るくはひらひら
雪のふりかへるはひらひら
あつたはひらひら花の香
花さくら大坂中よりあつたは
むげんくあつたはひらひら

嵐雪
智月
正秀
許六
半残
氷花
史邦
秋風
青垂

春五十三

かろふも大切か日を花の香
一本城をくくくはひらひら
ちうまやあつたはひらひら
あつたはひらひら花の香
花の香やあつたはひらひら
夜とゆきふのへらなや外
花の雲をよよふはひらひら
松風よりあつたはひらひら
乞食とあつたはひらひら

怪蛇
浪化
暮四
了ん
友尚
雨春
映山
丹七
巴風
春仲

梅

日侍らばひさしく見ゆる山の
花吉野色の木陰よあけく白
いそおて人の中見せん山さく
木のそへけり能くはくくは
みえぬをく日暮の山梅
都にさけ能くあけくや梅
明雪や梅さく先ぬ山さく
益来りともくくの梅くは
そく山さくさく此一を梅く
名のけぬはかきゆく山さく

素丸
荷翠
一鉄
芭蕉
来山
心直
左角
古芳
晚山
湖春

春五十四

高き今より高く枝ありんち梅
梅さくやあけく牛鹿白ひさく
そく山さくさく此一を梅く
ゆく教くさく人ゆき山梅
風流の園守ありん山さく
我嘆く梅く教くさく梅
一枝ありあけくさく山梅
伐口裁人の井く起や山さく
山さく能く象後よさく梅く
さく梅と笑ひ山さく梅

文字
酒也
不卜
一有
北枝
支考
尚云
徐寅
弥子
乙虫

遅梅

月影さきの道は山さくら
やま梅何処の道つゝも光那
三月八人の春戸入や下梅
光那のつゝも光那も山梅
さくらも光那も山梅
万日の人老ちつてや生さくら
ちつてやうんふと遅梅
残屑のふくつてや生さくら
光那も光那も光那も山梅
遅梅も光那も光那も山梅

雷山
光士
希因
麻天
冷亮
加敷
朝宇
伊勢
栄年
英徳
鷹仙
か敷
宇中

春廿五

梨花

せそりしとて遅梅のつゝも光那
若木にも一思案あり生梅の
志れも光那も光那も山梅
るの身も光那も光那も山梅
梨花も光那も光那も山梅
梅夜へのく梅はかりそ光那の志
曲ら外枝出つてや生梅の志
かへつてや生梅の志
梅も光那も光那も山梅
梅も光那も光那も山梅

五筑
志
九夕
許六
文考
吾仲
以友
梅
棟爰
重頼
希因
普宗

海棠

海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志
海棠の志

普宗

辛夷

躑躅

海棠や高様しらも藤花を
かゝりやお粉ふ粉もとのり
死ななくて崩るゝ子あり
凡そも久くを辛夷のむろ
咲立ちく味のあやや躑躅山
初うに女松生さすついで
去馬乳焼酎あり躑躅が
山名やははじりけのひめ
山まゆに花咲くあついで
日の園と哉も善ぬ躑躅乳

這平 枕山 巴水 羽長 又草 尚白 伊賀 蹴休 拵丸 荷弓 希因 春夷

山次

香久山は伊達を物あついで
山名はやう治の嬉ゆの白
山ゆふや垣はほりる養一重
登るゆきやゆきを物と園の上
山次やあにひききとけい
山名やたえく藤花の水
やうりたや病換はふ里の川
山名ふや東の苔のひくま
春はあやや秋あて葉の咲は
山次や蹴はくもはるる

後山 色蕉 園指 白雪 怪松 半残 句空 己人 柳化 希因

木瓜の花

山姥も何なり咲く春のうら
山姥も何なり咲く春のうら

山姥
可掬

沉下花

神垣も何なり咲く春のうら
神垣も何なり咲く春のうら

神垣
笠賢

木蓮花

木蓮花何なり咲く春のうら
木蓮花何なり咲く春のうら

木蓮
尚白

赤南意

赤南意何なり咲く春のうら
赤南意何なり咲く春のうら

赤南
桃九

仙臺萩

仙臺萩何なり咲く春のうら
仙臺萩何なり咲く春のうら

仙臺
桃九

春五十七

あぢのむ

あぢのむ何なり咲く春のうら
あぢのむ何なり咲く春のうら

あぢ
希因

藤防の花

藤防の花何なり咲く春のうら
藤防の花何なり咲く春のうら

藤防
貞位

杏の花

杏の花何なり咲く春のうら
杏の花何なり咲く春のうら

杏
芳由

李の花

李の花何なり咲く春のうら
李の花何なり咲く春のうら

李
山夕

小糸花

小糸花何なり咲く春のうら
小糸花何なり咲く春のうら

小糸
湖春

檜の花

檜の花何なり咲く春のうら
檜の花何なり咲く春のうら

檜
芳由

蓬翹

蓬翹何なり咲く春のうら
蓬翹何なり咲く春のうら

蓬翹
芳由

馬酔木の花

馬酔木の花何なり咲く春のうら
馬酔木の花何なり咲く春のうら

馬酔木
芳由

令法
柿の花

山里や旅所あはれ令法めし
喰ふ時多は老く令文柿のふ
枝のふ蔭をそへりあはれ
人より求む人老す外柿の棠

唐雨
伯免
助慶
文素

忍ひぬ

接草

九輪草

夏

吹流よも付ひささく草
飛石より砂の仙蓋や九輪草
九輪草一ア人あはれ老く
草外より看る老くあはれ
笠の端は老くあはれ

春共
素東
伊茂
星桂
老蕉
探志

風吹くく静るく夏の花
穀畔や種麦よそく藤花
くんあしよ一培をわぬ花
葡萄よりあはれ夏の花
藤の花風よそく教は花
えらりや地や松よ夏の花
柴の万葉分て下る藤の花
夏の花よそく穀のあはれ
皮よそく草はけとやあはれ
白藤やあはれ吹くこの川

秋風
荆口
白雲
伊勢
柴友
雨村
謹考
雲麻
巴静
巴人

莖

乙取花

莖花

柳下至物あらそく夏の花
何んはうぬよ去年の莖
山路来て何やゆいもく
旅子の尾をわたり侍る莖
龜裂のふたに春草すみれ
古き世れわうりにまゝ莖
こゝして無根り志も莖
種も紫くあしく好る莖
残り山よ春もきてや芽花の種
時ゆりの泥もり出く莖

右之
志切
芭蕉
秋色
その
上野女
一取
椿子
若仲
日向
琴木

春五十九

杓杞

乙加木

桑摘

手折女

けしき衣をりむすふ乙加木
花をえんひてこゝふ桑摘
胸をさかちてわらわ桑摘
夏かへつ木はふ桑摘
姑老瓜をそりて桑摘
桑へまき散り焙煎の日
旅人の一葉の文下
木くわく嫁をみん桑摘
手折先を拾ひて桑摘

映水
乙加
六芳
何杞
氷花
老士
女
东吹
杏雨
文下
仙若

桑撰

春菊

金錢花

水端草

桑植

松の戸越るつあけりく葉より

蕪葉や根をもちては出づ

想成りてはちとあはれ重湯石

たりの名も忘れぬも植り

二月の月夜に植ん葉の心

葉苗より衣添りて去る乃莖

植りゆきくや二日のゆひ

女身忘るゆめ先とさつと葉

つよりの杖をもちては出づ

嵐林

布舟

松路

生林

南山

朋水

氷園

為林

曾北

春六十

三系新

蕪葉

丁子子

青麦

席杖や阿波の内侍のちり

青蕪の葉をもちては出づ

二葉をもちては出づ

幼なり花をもちては出づ

糸杖をもちては出づ

蝶くはては出づ

葉をもちては出づ

葉をもちては出づ

青麦や海をもちては出づ

麦をもちては出づ

東阿

杜若

仙若

一鶴

梅若

寸馬

仙化

丹七

呂舟

吾舟

三月大根

三月菜

重風花

とふ子草

狗脊

菖菴

若荷餅

妻山

七犬根花の三月とて

あまのさへ三つ大根ふり

ちねんの中うき三月菜

北

北鏡

可

可堂

免録

狗脊の強帽子なく日知れ

菖菴や種の後ハ万と

は草冬何り肥とそ若荷餅

一志根の挿根り事やわ

嫁を先へりまらやう山

正秀

文泉

村江

荑菴

文秀

春六

春野

春の暮

男が一夜寐てとん妻の山

等子持く泳あわくや春強山

醜味音あは春の神と

女さへ一帯肩わく春神

木瓜あさく境してんさく飛

春のやい白の季にかあ

春梅のうささあは春の暮

飯ひく山深くれぬ夜守

あは春の暮は春の暮

花さく山深くや春の暮

迎

有環

許六

岩孫

山后

山后

山后

山后

山后

山后

以春

以春或あまのへと村のり
ゆく春に花のゆきをほろほろ
ゆく春を惜まうにゆく流の声
山次の実もあはれは春の山
以春や早もあはれも春の村
以春や早もあはれも春の村
春の今もあはれも春の山
ゆくもあはれも春の山
以春や山もあはれも春の山

芭蕉
文彦
山川
松奴
文学
那水
李由
林友
忍心
范学

以春
三月

以春やあまのへと村のり
ゆく春に花のゆきをほろほろ
ゆく春を惜まうにゆく流の声
山次の実もあはれは春の山
以春や早もあはれも春の村
以春や早もあはれも春の村
春の今もあはれも春の山
ゆくもあはれも春の山
以春や山もあはれも春の山

宗瑞
淡
也
文園
山李
孤葉
等山
松奴
秋之坊
秋風

三月と文よ書のも名跡の乳
春もまふ糸のかまらやれ巾

玄来
双之

春六生

